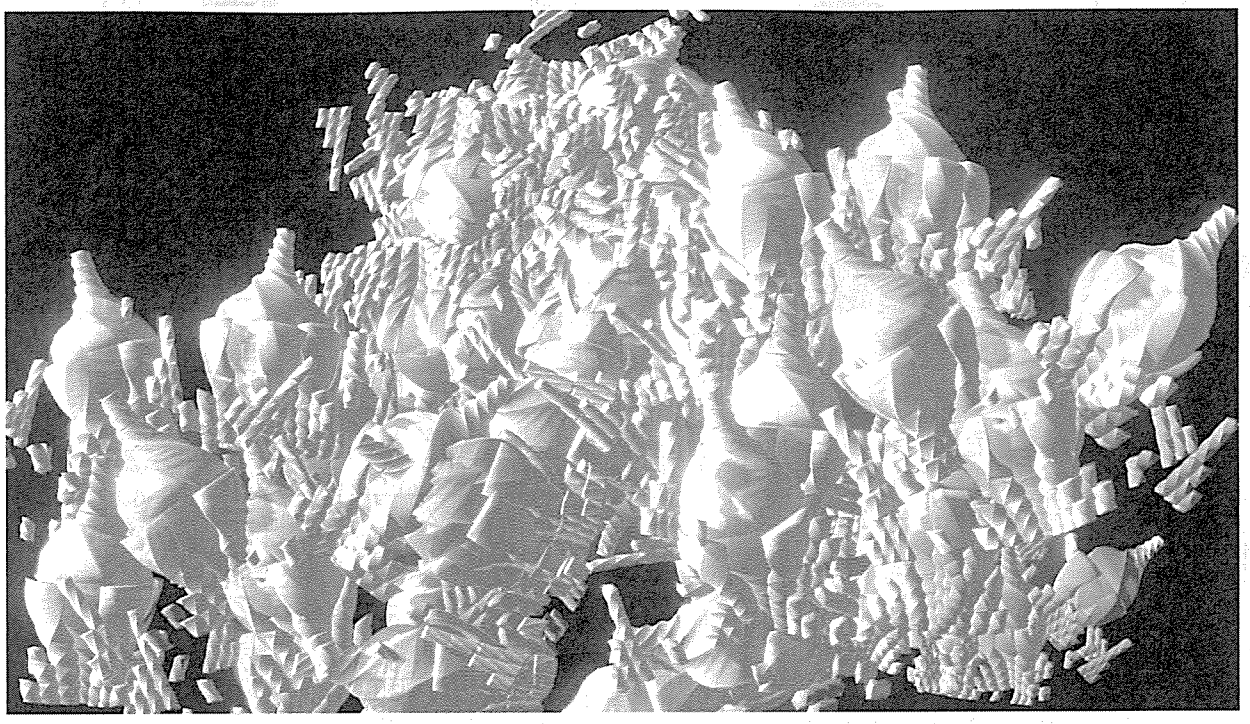
前高前中
京浜同窓会報

第52号
平成30年12月15日

発行責任者　岡庭邦夫
連絡先　東京都中央区日本橋小網町七―八
日本橋ウィンテルビル四階
神林光法律事務所
TEL　(〇三)六二六四―九〇一〇

私の一枚

本欄用の自作の作品をご提供下さい　連絡先：下記「会報編集員」



「バベルの崩壊Ⅱ」F60号

東京都知事賞受賞作品

高田　哲雄　(昭和43年卒)

2018年7月3～8日東京都美術館で開催された亜細亜現代美術展において受賞。本来は赤と青のメガネで立体に見るアナグリフ作品であるが、今回は本誌のために特にモノクロ画像とした。美術評論家のワシオ・トシヒコ、清水康友両氏が「社会的崩壊に対する警告的なメッセージと、絵画に3DCGを応用したことが秀逸である。」と評した。

巻頭コラム　赤城風

会長　家中　隆　(昭和43年卒)

平成はまだ来年4月末まであるが、今年は残りわずかになった。それにしてもこんな大揺れの年になると予想した人は少なかったのではないか。アメリカを中心とした貿易戦争の激化や北朝鮮問題などもあったが、我が国にとっては連日40度を越す酷暑や西日本を中心とする集中豪雨とそれに伴う洪水や土砂崩れ、度重なる台風の襲来、加えて震度7を記録した北海道の地震など自然災害が甚大な被害を齎した年となった。

9月6日の北海道地震の折は、私も震源地近くに旅行で滞在していたが、激しい揺れの直後から全道がブラックアウトしホテルは照明もTVもつかず、情報を得ようとしても電話やインターネットも全く途絶、唯一SNSだけが機能した。当然ながら交通機関も停止しており、本州に戻るにも飛行機も新幹線も運行の目途が立たず、駅にはダンボールの上に寝て再開を待つ多数の人々。やむなくレンタカーで函館に出てそこで1泊、翌日フェリーで青森に渡り、動いていた東北新幹線に飛び乗り東京に戻ってきた次第。また、生きている以上、食糧や水が最低限必要だが、商店は殆ど停電で閉店、開いてるコンビニもわずかな菓子類しかなく、旅行者にとっては食糧確保はなかなか難儀な仕事だ。山間部では土砂崩れにより痛ましい被害が出たが、都市部では建物の被害よりも生活機能の喪失の影響が大きく、日ごろ如何に、電気や通信、交通などインフラの恩恵を受けているのか一連の体験を通じ痛感させられた。

加えて、東日本大震災の時もそうであったが、こうした異常時にあっても、列を乱したり、ものを奪い合ったりの騒擾状態に陥らず、整然と対処するのは日本人の美徳と思う。都市部では旅行者のために炊き出しが行われたり、無償で宿泊設備などの提供が行われた。北海道に限らず、西日本の豪雨被害地などでも多くのボランティアの皆さんがご活躍だ。こうした弱者を労わり、お互いを思いやる心根は昔から災害の多い日本ゆえのDNAなのか、いつ聞いても心温まる話であるし、これからの新しい時代にも大切に引き継いで行きたい文化だと思う。

ホームページ　http://web-dousoukai.com/maetaka-keihin/
メール　インターネット係　maetaka-keihin@web-dousoukai.com
フェイスブック　https://www.facebook.com/maetaka.keihin

第61回 京浜同窓会総会

六月八日 品川プリンスホテルで開催

講演は 前聖路加国際病院整形外科部長 黒田栄史氏（昭和46年卒）

梅雨入りの好天に恵まれた6月8日（金）午後6時より第61回前中・前高京浜同窓会総会が、今年で3度目の会場となる品川プリンスホテルにて、昨年同様の約170余名もの出席者を集めて執り行われた。

総会は金子議長の議事進行で、家中会長挨拶に始まり、細野幹事長による平成29年度事業報告、小川副幹事長の会計報告及び高橋会計監事の会計監査報告、次に決議事項として平成30年度事業計画、平成30年度会計予算が審議され出席者大多数の同意を得て承認された。

続いて講演会に移り、講師に前聖路加国際病院整形外科部長　黒田栄史氏（昭和46年卒）を迎え「いつまでも健脚であるため…日野原先生の遺言」のテーマで講演していただいた。

充実した豊かな老後を過ごすためには、骨を丈夫にし、足腰を鍛え、歩行運動、栄養バランスの良い食生活、十分な睡眠等、身近に簡単にできる運動が大切と、分かりやすく説明していただいた。出席者の皆さんもメモを取り熱心に聴いていたのが印象的であった。

会場を階下のフロアに移動しての懇親会は昨年と同じく立川談之助師匠の司会で、曽我本部同窓会会長の挨拶、澤田前高副校長の近況報告に続き、満場一致の乾杯の声で幕を明けた。

講演会

恒例の東京倶楽部ジャズバンド演奏が流れる中、懐かしの焼まんじゅうの模擬店に心躍らせ、瞬時に前中前高時代にもどり近況を報告し旧交を温め合った。最後に全員での校歌、応援歌、凱旋歌の大合唱が会場を轟かせていた。

総会

懇親会

前橋高校京浜同窓会　平成29年度決算報告書

【一般会計】　自平成29年4月1日　至平成30年3月31日

収入の部		支出の部	
前期繰越金	1,442,841	郵便振替料	70,200
年会費	1,270,000	総会費用	1,306,750
寄付金	755,370	会報作成費	1,102,041
総会収入	1,422,000	通信費	428,161
会議費収入	434,807	会議費	808,361
利　息	6	事務用品費	10,030
		慶弔費（祝金等）	180,000
		事務局経費	60,000
		IT管理費	30,000
		四季の会補助費	50,000
		部会補助金	30,000
		雑費	59,400
		次期繰越金	1,190,081
合　計	5,325,024	合　計	5,325,024

貸借対照表　平成30年3月31日

資産の部		負債及び剰余金の部	
現　金	25,991	次期繰越金	1,190,081
振替預金	490,431		
郵便預金	673,659		
合　計	1,190,081	合　計	1,190,081

【基金会計】　平成30年3月31日

前期繰越金	2,014,861	次期繰越金	2,015,032
基金会計繰入	0		
利　息	171		
合　計	2,015,032	合　計	2,015,032

上毛新聞
平成30年
6月9日（土）

故 日野原さんの思い出

前高京浜同窓会 黒田さん講演

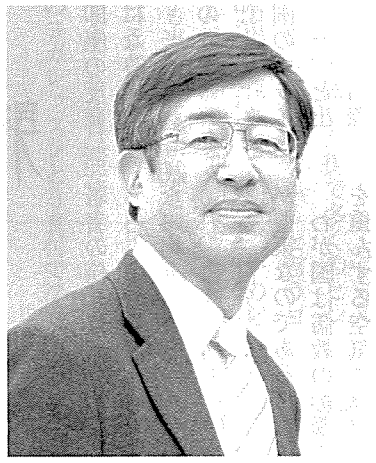
首都圏在住の卒業生でつくる県立前橋高京浜同窓会（家中隆会長）の総会が8日、東京都内のホテルで開かれ、約170人が互いの近況を報告し、校歌を歌って旧交を温めた。

恒例の講演会は聖路加国際病院（東京都）で整形外科部長を務めた黒田栄史さん（1971年卒）が担当した。「いつまでも健脚であるために」と題し、豊かな老後を過ごすために足腰を鍛える大切さを強調。片足立ちなど家庭で簡単にできる運動を紹介した。

昨年、105歳で死去した同病院名誉院長の日野原重明さんと地下鉄サリン事件の患者の治療に当たった思い出などにも触れ「体力以上に精神がすごかった。人のために生きることを大切にしていた」と振り返った。

講演する黒田さん

第62回　京浜同窓会総会の予定



平成31年　**6**月**6**日（木）　午後6時より

会　　場　品川プリンスホテルにて

講　　師　**佐藤　洋** 氏（昭和43年卒）
内閣府食品安全委員会委員長（東北大学医学部名誉教授・医師）

講演テーマ　『スマートライフのために…
意外と知らない食のリスク』

＊食の環境が大きく変化する中で日本の食生活のリスク評価と安全を守る食品安全委員会の興味ある取組みを語っていただきます。

講師略歴

昭和43年　3月　群馬県立前橋高等学校卒業
昭和49年　3月　東北大学医学部卒業
昭和49年　5月　財団法人竹田総合病院（福島県会津若松市）内科
昭和54年　3月　東北大学大学院医学研究科修了（社会医学系公衆衛生学講座）
昭和54年　4月　東北大学医学部助手（公衆衛生学教室）
昭和54年　9月　アメリカ合衆国ロチェスター大学ポストドクトラルフェロー
平成 元年　4月　東北大学医学部教授（衛生学教室）
平成 9年　4月　東北大学大学院医学系研究科教授（社会医学講座環境保健医学分野）（機構改組による変更）
平成23年　4月　独立行政法人国立環境研究所理事、東北大学名誉教授
平成24年　7月　内閣府食品安全委員会委員
平成27年　7月　内閣府食品安全委員会委員長（現在に至る）

桑弓直射

「ファースト」考

角田　透
（昭和四十二年卒）

英語圏ではレディーファーストという言い方がある。字義通り解釈すれば、淑女に対しては何かの折につけて尊重して振舞うということで、女性尊重の美風とされている。その起源においては、まったく逆の趣旨との説もあり、興味をひかれるが、その探求はさておき、とにかく女性尊重の意で使われるレディーファーストの「ファースト」を取り上げてみたい。

同じような言い廻しで記憶に新しいのは小池東京都知事の選挙戦での「都民ファースト」とトランプ大統領の大統領選での「アメリカファースト」であろう。マスコミ、特にテレビで繰り返し放送されたせいか、画像と共に思い浮かぶが、これらの「ファースト」も都民第一主義、あるいはアメリカ第一主義ということで、都民最優遇、アメリカ最優先の意と解釈されている。その後、小池さんはともかく、トランプさんは益々勢いが増しており、最近ではGDP世界第2位の中国を相手に貿易不均衡が怪しからんとばかり、中国からの輸入産品に高関税を課すことを表明している。それに対する中国の習さんも大人げなく、即座の反発を示し、同じく高関税で応酬することになり、まさに米中貿易戦争の観である。

武士は食はねど高楊枝とは見栄張りの武家の暮らしを揶揄したもので、どなたもご存知であるが、これとは逆に、米国は世界最強・最大国のプライドをかなぐり捨てて自国の利益を守るんだ、と出ているわけである。よくよく考えてみるに、国際政治というものは何はともあれ自国の利益が最優先であり、当たり前といえば、それまでだが、ドイツのメルケル首相のように自国ファーストではなく、難民受け入れ、共生を目指すとする人もいるのに、これは何だ、という気がする。公共の利益を掲げる政治家はメルケルさんの他にもいたが、メルケルさん自身も、最近、逆風を感じたのか、任期一杯は在任するが、その後は政界を引退との報道があった。公共を考える人は絶滅危惧種になってしまうのか、まさに自分ファーストの嵐が吹き荒れている感がある。

さて、話は変わるが、小生も寄る年端のせいか、街中に出て若い人たちの振る舞いを見ていると、最近の若い者は躾がなっとらん、と感じる世代となってしまった。歩きスマホはお止め下さい、というアナウンスをよく聞くが、歩きスマホは当たり前で、止める風は見当たらない。公共の通路における人の流れの最大の攪乱因である。車内混雑時でも、小荷物と共に1.5人分位の座席を占拠して涼しい顔の若者もいる。敬老の精神を持つ若者も居ないわけではないが、どう見ても主流ではない。若者の傍若無人の体を見ても、注意する乗客はもちろんいない。もしかすると不遜の輩が日本人でない場合もあるかもしれないが……。まずはともあれ、誰もが、リスク回避を第一としているのである。自分ファーストの嵐には立ち向かわないのが得策なのである。

わが国は儒教の影響を受けて公共や全体の秩序を重んずる空気を尊重する気風があるものとされている。そして、それは隣国中国から朝鮮半島を経由して伝えられたものである。とは言うものの、それら諸先輩の国々であっても、例えば中国は、国際社会からの批判をよそに、少数民族に対する圧迫政策をやめず、南シナ海南沙諸島でも自儘な占拠行動をとっている。韓国についても、我が国との間に竹島を始めとする複数の外交問題がある。どれを見ても儒教精神はどこに行った、の風である。

と、そのようなことを考えていると、国際社会というところは利己主義、自国第一主義でないと生き抜いていけないかも知れない、と思わざるを得なくなってくる。となると、次の時代の日本を担ってくれる若者たちが自己中心主義であることは、わが国にとって幸いであるかも知れないな、……やはり「自分ファースト」か、とも思うのである。

国際社会の秩序は尊重されなければならないと思うが、さりとてひとりワリを食うわけにも行かない。読者諸氏のお考えは如何であろうか……。

随想

二度目のインド
（ヨガの聖地リシケシュへ）

大林　彰
（昭和四十六年卒）

ガンジス川畔にて

デリーのインデラ・ガンジー国際空港を降り立つとムッとする熱気が体を覆う。夜10時を過ぎているのに空港周辺は無数の車で溢れ返り、クラクションの音が鳴り止まない。その周りには大勢の人が群がり騒然としている。目の前には最初に訪れたときと同じ光景が広がっている。

次男家族のインド生活が始まり、期せずして私たち夫婦が最初にこの地を訪れたのは2年前だった。目に映るものすべてに只々驚くばかりだった。

家族は、デリーから30km程離れた「グルガオン」（現在はグルグラム）という街に住んでいる。この街はかつて荒れ果てた原野であったが、デリーとは空港を挟んだ位置にあり、近年急速に発展した典型的な人工都市である。多くの日本企業がオフィスを構えるデリーは最近環境問題が深刻となり、特に大気の汚染度は北京のPM2.5の3倍とまで言われるようになった。その為、デリーへの集中を緩和するため周辺都市の開発を進めて出来たのがこの街である。高速道路や地下鉄の拡張、オフィスビルやショッピングモール、高層マンションといったインフラが短期間で整備され見違えるほどの都市が出現した。しかも未だ開発半ばであり今後更に拡大を続けると言う。その為、今までデリーに本拠を置く多くの日本企業も家族共々この街に移りつつあり、今では現地の富裕層や外国人が多く住む比較的住みやすい街となっている。只この街もこの10年間の急速な発展で、今後数年で人口も100万人に達すると言われ、デリーと同様に環境問題の芽も出始めている。人と車の急増、工場の排煙、周辺における焼畑の影響や地形（盆地状）や季節風がその原因と言われている。主に冬場となる11月～2月頃までの大気汚染は老人や子供への影響が懸念され、特に小さな子供を抱える殆どの日本人家族はご主人を残してこの期間は日本へ帰国するという。当然息子家族も同様である。

高層マンション群（グルガオン）

インドではのんびりとした旅行は期待できない。人が多すぎること、時間が守られないこと、そして交通事情（特に道路）が悪いことである。かなり整備されてきたとは言え相応の覚悟が必要となる。前回は世界遺産のタジ・マハールを訪れたが、往復500kmの道のりを車で日帰り旅行した。高速道路とは名ばかりで自転車も走り、牛も横断する有様である。

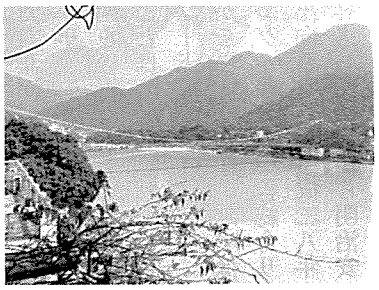
今回はヒマラヤ山麓にあるリシケシュという街を訪れた。ここはヨガの聖地と言われ、世界中のヨガ愛好者が訪れる街である。私達夫婦も日頃のジム通いでヨガレッスンを受けており、二度目のインドで本場のヨガ体験を楽しみにしていた。ガンガ（ガンジス川）上流に沿って発達した街で多くのヒンズー教寺院や〝アシュラム〟と言うヨガ・瞑想道場が点在している。かのビートルズがこの街で長期間ヨガ修行をした道場も当時のまま残されている。多くの人はこのアシュラムに併設された宿泊所で1～2ケ月滞在するという。日に2回のヨガレッスンと3食付で70ORh（約千円）／泊と非常に安い。勿論、私達のような旅行者向けのヨガクラスもあり、ワンレッスン1時間半で200Rs（300円）。

こんな奥地ではあるが日本人の姿もちらほら見られた。

ただこの街では〝禁酒〟〝禁煙〟〝菜食〟〝静寂〟を遵守しなければならない。まさに〝修行の地〟である。たった一泊であったが、酒好きの私と肉好きの家内にとっては十分であった。

二度目のインドで感じたことは、急速に発展する都市部と地方の生活環境の大きな格差である。また古い慣習や未だに残る階級制度が貧富の差を生んでいる実態が垣間見られた。中国をも凌ぐ巨大な国は未だ〝混沌〟の中にある。他国を見れば日本が分かると言うが、まさに〝ザ・インド〟を体感してそれを実感した。

本年六月八日の京浜同窓会に初参加した。今回の講演が同期の黒田栄史くんと言うことで前高卒業後初めて会う


リシケシュのガンガ（ガンジス川）

こともあり楽しみにしていた。四十数年ぶりであったが、互いに直ぐに分かった。故日野原重明先生の話ではやはり長寿の秘訣に耳を傾け、現在の自分の健康状態にアドバイスを求めるなど非常に好評であった。医師の立場からの話は特に興味深いものであり、当時と変わらぬ彼独特のユーモアを交えた講演はあっという間に感じた。特に今回は四十六年卒のテーブルが用意されたこともあり会話や記念撮影で大いに盛り上がった。

また新人紹介や若い会員による力強い言葉の数々、そして締めの〝赤城おろし〟までを通して前高の絆が引継がれて行くのを強く感じた。

「前高3兄弟」、そして「2番目」のいま

石井　建志
（昭和五十四年卒）

兄はバッター、弟はピッチャー、私はキャッチャー。背番号1＝星飛雄馬気取りの弟、2番＝伴宙太役の私という「巨人の星」のバッテリーに加え、3番＝なぜか長嶋茂雄を兄。富士見村（いまの前橋市富士見町）のとあるグラウンドで野球をして遊んだ休日の記憶が時々蘇ります。年齢逆転の1、2、3番。私は男三人兄弟の真ん中、いつも2番目。

三人とも幼少の頃から高校を卒業するまで富士見村で育ち、名門・前高に入り、それぞれ大学を卒業しました。そして今は、三人とも東京での暮らしの方が長くなり、会社人生も終盤を迎えています。

兄・泰幸（前高昭和五〇年卒）は東京で税理士事務所（税理士法人アイム）を経営、私・建志（五四年卒）は後で書くとして、弟・宏志（五五年卒）は東京で動物病院（東京動物医療センター）の院長をしています。

父・泰明は平成十五年に他界しましたが、生前は群馬県畜産試験場の獣医技師から同試験場長を勤めました。母は富士見温泉音頭やあいのやま温泉（前橋市荻窪町）音頭などの作詞に携わりましたが、いまも富士見の自宅で作詞や俳句などを楽しみながら余生を送っています。

そんな両親は息子3人が前高を出て、いっぱしの仕事をしていることが自慢でした。富士見中からは毎年数名しか入学していなかったので確かに珍しい兄弟だと思いますが、前高卒業後四十年近く経って、いまを自慢できるかどうか？というと「まだまだ」だと思うのです。

たまたま京浜同窓会誌への寄稿の依頼に接し、同級生、兄や弟の同級生、そして三人に同窓の誼でご厚情をいただいている皆さまにご挨拶させていただくと共に、これからも何かとお世話になりたいと思い、この寄稿も快くお受けした次第です。

私は中学時代に生徒会長もしていたので、表に立つのは嫌いではありませんが、あまり目立たない普通の高校生でした。昭和五四年と言えば、同級生の松本稔君が五三年春の選抜高校野球大会で完全試合を達成した年次であり、「あゝ、あの時代か？」と思い出していただけることでしょう。

私は獣医だとか医者とかの道を目指そうと理科系進学コースに進んだので、高校三年生のときのクラスメイトは医者や技術者が多い。眼が色弱なことや、数字はできても物理や生物など理科には興味がなく小説を読んでいた方が楽しかったことから、一浪しているときに文系大学志望に切り替えました。

昭和五九年に横浜国立大学を卒業し、安田生命保険（現・明治安田生命保険）に入社しました。

生命保険会社に三十二年間勤めましたが、保険屋さんの仕事はほとんどせず、大半は資産運用としての企業融資部門に就き、多くの企業に訪問したり、審査担当や営業責任者として財務諸表を見たり、経営者の声を聞いたりしてきました。バブル絶頂期から就いた職務でしたが、バブル崩壊後の住専国会や山一證券などの経営破綻、竹中平蔵大臣による不良債権回収の促進措置、銀行再編、リーマンショック、そして東日本大震災など、多くの方々が路頭に迷いそうな事象に接してきました。生保でも破綻が相次ぎ、私も平成十三年に第百生命が破綻したときは保険管理人チームの融資責任者として赴任し、実際に路頭に迷いそうな職員に接してきました。

激動の平成時代、企業の浮沈を目の当たりにして、そしてそこで知り合った多くの方々の企業経営の考え方や経営危機を乗り越えた経営手腕などを教えていただく機会を得ました。

また、東日本大震災で被災した大手製紙会社の経営危機時に、融資営業責任者として「私たちは金融面で支えます」と申し出た言葉が、日経新聞の社長インタビューで、「メイン銀行や生保から支援表明をいただいている」と紙面に載ったことは今でも忘れず、私の自慢のエピソードです。

そんな経験から平成二六年にみずほフィナンシャルグループの芙蓉総合リース（株）に出向となり、平成二八年に執行役員に昇格したことから明治安

田生命を退職（転籍）しました。現職・営業推進部長として引き続き多くの方々と面談する日々だが、前高同窓の誼も使わせていただくこともあり、「故郷の誼って素晴らしい」と良く思います。

単なるリース営業ではつまりません。ホテルや学生寮などの建物のオーナーにならせていただいたり、エネルギーや環境ソリューションを考えたり、銀行や販売会社と提携して商品を一緒に販売したり、いろんなビジネスソリューションを解決するために幅広く会話をしながら様々な提案をしています。

これからもいろんなネットワークを活かしながらもう少し頑張ります。「前高3兄弟」の同級生トータルは千人くらいでしょうか？また、この拙文を読んでいただいた同窓会の皆さまにもお目に掛かる機会があれば幸いですし、泰幸や宏志共々これからもよろしくお願い申し上げ、筆を置きます。

経済学再入門
～タイ留学記～

諸田　浩一
（平成二年卒）

私は今、タイのカセサート大学経済学部大学院に留学しています。日本で仕事をしながらの留学ですので、飛行機通学です。分野は、農業・資源経済、環境・エネルギー経済です。

カセサート大学は、日本語で訳すと国立農業大学という意味です。タイではチュラロンコン大学、マヒドル大学と合わせて、3本の指に入る人気大学です。タイは、農業が競争力のある国なので、アグリビジネスは人気です。キャンパスは緑が多く、南国の雰囲気そのままに、リゾートのような感じです。時々、大きなトカゲが、主のように我が物顔で道を歩いています。

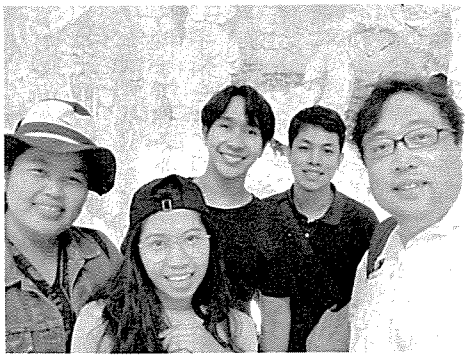
大学生は制服です。女子学生は、白いシャツに黒のスカート、男子学生は、緑のネクタイをしています。前高時代から私服が許されていたので、衝撃を受けました。

インターナショナルコースは、授業は英語です。20代の学生に交ざって授業を受けています。先生は女性が多く、男性の先生も柔らかい感じです。ほほ笑みの国、タイランドです。生徒はタイ、ベトナム、インドネシア、カンボジア、フィリピン、ミャンマーなどのアジア各国から来ています。博士課程の同期は、二人のエチオピア人の女性です。スマートな女性たちです。アフリカのイメージが変わりました。既に大学の先生である方々が、タイに留学して修士号や博士号を取得して後、本国に帰って教鞭を取るというのが一般的な留学のケースのようです。

「少年老い易く、学成り難し。一瞬の光陰軽んずべからず。」

なぜ今、海外留学なのか。なぜ、今タイなのか。

海外留学に至るまでの最初のきっかけは、東大大学院での挫折に始まります。学部でバイオテクノロジーを学び、大学院でアジア経済の研究分野に変更しました。学生当時、タイバーツの暴落に始まるアジア通貨危機が有りました。タイやベトナムなどの農村開発、又は日本の農業政策の研究をしていた私にとって、グローバルマネーで一国の経済が破綻しかねない現実は衝撃的でした。「リアルな経済を知らなければ、経済学は語れない。」


カセサート大学

研究を諦めて、社会人となりました。研究を止めることを師匠の教授に相談したところ、アジアの大学への留学を勧められました。環境を変えて、研究を継続する気にはなれませんでした。少年老い易く、気づいたら中年になっていました。「まだ、何もなしていない。」京浜前高同窓会の参加させて頂いて、学者を目指していた、少年の頃を思い出しました。

東大で同じ研究室だったアモンラット・プルンブーン博士が、カセサート大学のバイオケミストリーの学科長をしていました。彼女の勧めで、カセサート大学の大学院に入学しました。

一瞬の光陰軽んずべからず。20年前に途上国アジアを豊かにしたいと開発

経済を志した私が、今は、アジアの先生から指導を受けて研究を行っています。日本は失われた10年から20年へと経済の停滞が続いています。バブル崩壊以降、あっという間（一瞬の光陰）だった気がします。タイの先生方はアメリカ、ヨーロッパで学位を取られています。国際的です。コミュニケーション能力で言えば、追い抜かれている気すらします。

「学ぶに遅いということはない。」と言われます。2018年のノーベル経済学賞は、内生的経済成長論で有名なポール・ローマー博士と、環境経済のウイリアム・ノードハウス博士が受賞されました。1960年代に東大の宇沢教授が大きく貢献した経済成長論は、1990年代に、再度ブームを迎えていました。そして環境経済と合わさって、現代に多くの影響を与えています。

「宇沢教授は、なぜノーベル賞を取ってないのか。」とカセサート大学の先生に問われました。ノーベル賞は取らなくても、世界の経済学に影響を与えたことは間違いありません。

経済学再入門。社会人としての規律は守りつつ、いつまでも、赤城山を見上げて過ごした少年の頃の学問への情熱は忘れないでいたいです。

随想

「ブラックペアン」との出会い

心臓外科医
山岸　俊介
（平成十一年卒）

私は昭和56年群馬県前橋市に生まれ、城南小学校、前橋一中を卒業し、県立前橋高校に入学しました。1浪して慶応大学医学部に入り、現在心臓外科医として東京新小岩にある病院で働いています。今年「ブラックペアン」というTBSのドラマの医療監修を経験しました。最終回が終わった後、そのホームページに「あとがき」として感想を書きましたので、今回それを掲載させていただきたいと思います。

「あとがき」

「ブラックペアン」の医療監修という話が来たのは昨年の年末あたりだったでしょうか。スタッフの方々が病院に来て、企画内容などの話を聞き、手術見学の打ち合わせがあり、それから気付いてみたら、毎日のように連絡が来て、週3回くらいのペースで打ち合わせをして、リハーサルをして、撮影が始まってからは、週2回以上のペースで現場に行っていたような気がします。

医者になって、12年がたち、1人で手術をするようになり、少しずつ自信と、同時に手術の怖さを改めて感じ、最高の手術を提供するためにはどうすればいいか、病院で日々考え、努力をしていた時の話でした。

テレビ関係の仕事、ましてや医療監修などという仕事は今までやったことは一度もありませんでした。自分に出来るのかなと考える間もなく、医療担当のスタッフさんに「先生は渡海先生と年齢も近いですし、手術もお上手ですし、ぜひお願いしたいと思います」と上手く乗せられ、良い気分になりスタートを切ったのですが、正直、想像以上に大変な仕事でした。そもそも、1つのドラマを作り上げるということが、これだけ大変な作業で、想像を超える数の人々の思いが、そこには詰まっているんだということを知って、そうなると、中途半端な関わり方はできず、医療部分の展開、疾患と手術の流れを考え、資料を集め、台本をチェックして、打ち合わせ、リハーサルに行き、現場に行き、手術場をセッティングし、編集をチェックして…徹夜で緊急手術した後にスタジオに行った事もありました。院長に頭を下げて手術シーンの撮影に行かせてもらったこともありました。

それは一つの使命感でした。

最初にお話をいただいた時、恥ずかしながら原作を読んでいませんでしたので、「ブラックペアン1988」を手にとって読みました。渡海は消化器外科医で、渡海の父親は内科医で医療過誤の濡れ衣を着せられ、病院を追われ、亡くなったと。今回のドラマでは、消化器外科医の設定は心臓外科医になり、渡海の父親の設定も内科医から心臓外科医と変わっていて、父親の無念を晴らすべく、執念と尋常でない努力で、渡海は天才的な手術の技術を身につけた。

私の父親も、心臓外科医でした。

私が5歳の時に、久しぶりに早く帰ってきた父は手術中に誤って針を指に刺してしまったと母に言いました。医療事故でした。その手術をした患者さんはB型肝炎ウイルス陽性だったと。父親はその数週後に劇症肝炎で死にました。本当にあっという間でした。朝から晩まで休みなく患者のために尽くし、手術をしていた屈強な父親が31歳の時、いきなり死んだのです。こんなにも、人の命って儚いものなのだと、5歳にして思い知らされました。

それから、志半ばで命を落とした父親の無念を晴らすべく、私は心臓外科医となり、31歳を超える頃から手術を

するようになりました。父が越えられなかった年齢を超え、父のできなかったこと、救えたであろう命を救うべく、日々頑張っていた時、この「ブラックペアン」の話をいただいたのです。

「時々誰かが、僕の人生を操っているような気がする」という瞬間が、今まで何回もあり、不思議な出会い、縁で、今までの私の人生は構成されていて、手術が出来るようになったのも、数々の先生方との出会いと、先輩方の教育のお陰であります。現在日本心臓外科学会の会員は４０００人以上いて、この監修の話は誰に来てもおかしくなかった。ただ、何かの縁があって、自分のもとに来た。偶然だとは思えなかったのです。

失敗しそうになった手術を、天才外科医が超絶な腕で救うというような単純な医療ドラマであったら、ここまでこの監修に没頭したでしょうか。外科医の腕と最新医療の対立という構造の裏で、自分と非常に似た背景を持つ渡海が抱える父親への思い、佐伯教授との確執、複雑に入り乱れる人間ドラマがあって、医者とは何か、命とは何か、この今まで幾度となくテーマとされてきた「命題」に、この作品に関わる全ての人がもう一度最初から必死に取り組んで…、皆さんのその姿に強く共感し、深く感銘を受けなかったら、この作品にここまでのめり込むことはできませんでした。

この「ブラックペアン」で、命を落とした患者は1人もいません。亡くなっているのは渡海一郎先生だけです。渡海征司郎の天才的な外科医としての腕の根源にあるのは、父親の死であり、佐伯清剛への復讐心でありました。佐伯教授もまた、「何より、示さなければならないのです」と、亡くなった渡海一郎先生の思いを継承するべく、突き動かされている。この作品で唯一命を落とした人が、一番影響力を持ち、全てのシナリオを作っている。

亡き人の無念を晴らすという思いは恐ろしく人を成長させ、人生を大きく変えます。私も父親が心臓外科医で、死んでいなかったら、今何をやっているかわかりません。全く違う仕事をしていたかもしれません。亡くなった人は生きている人以上に人の人生に大きな影響を与える。

「亡くなった人の魂は生きている人の心で生き続ける」とよく言われますが、それは真実で、分子レベルで生体を研究する大学病院で学び、科学を駆使して、人工心肺を使い、心臓を止めて手術をしている現在でさえ、私はこの非科学的事象になんら疑問を持っていません。

渡海征司郎と渡海一郎が2人でタバコを吸うシーンを見ると自然と涙が出る。私の父親もセブンスターを吸っていました。

現場で感じるこのドラマにかけるスタッフの方々、演者の方々、海堂先生の思い、全ての熱量がとてつもなく、命を前にした人間の思いを描く情熱は、我々のそれ以上でありました。私自身も感化されて、完全燃焼することができました。すべてを出し切ることができました。

これだけの一流の人々が集まり、必死になって一つの作品を作り上げる姿、突出した才能と、その努力の果てにある芸術、その中で、すこしでもこの作品に協力出来た事は、私の一生の宝であり、この巡り合わせを実現してくれた亡き父に感謝せずにはいられません。

こんなこと有り得ない、リアリティーがないと、医療従事者の方々のなかには医療ドラマを見て不快に思われる方もいると思われます。ただ、リアリティーの追求といって、1時間心臓手術の映像を流したところで、1針1針にかける我々の魂は伝わらず、ただグロテスクなだけで、何も生まれません。あのミケランジェロのダビデ像のモデルはガリガリに痩せこけた青年であったというのは有名な話です。男の理想像はかくあるべきという作者の演出があり、あれだけの美しい均整のとれた筋肉美が表現されて、人々を感動させる。我々医療従事者の命にかける思い、そこをより鮮明に劇的に描けるのはやはり、エンターテイメントに命をかけている人々に他なりません。毎日のように手術室にいて、リアルに手術をしていますが、感動したことは一度もありません。しかし、佐伯教授を助けるため、皆で力を合わせて懸命に手術をするシーンには、激しく心を揺さぶられます。白衣を着た医者の後ろ姿を毎日嫌というほど見ていますが、何とも思いません。しかし、全ての謎が解けた後に、「じゃあな。お前は良い医者になれ」と言って病院を去る渡海の背中を見たら、涙せずにはいられません。

最後に、数分のシーンを撮るために数時間かかり、1つの手術シーンを撮るために朝から晩まで続いた撮影、そこにはさまざまな人のさまざまな思い、想像を超える量の準備、繊細で高度な技術、決して妥協しない気持ちが詰まっており、1シーンの裏には膨大な量の表に出ない映像と音があります。医学的整合性を保つために1秒のシーン、一医学用語を入れるなら、複雑に入り組んだ人間ドラマ、感情の動

き、心の機微を表現するための演者の方々の一瞬の表情、一言を入れたほうが人の心に響くことは自明です。

少しでも、表現しきれなかったその医学的整合性を保つために、私の文章が役にたてばと思い、長々と、時にわかりにくくなってしまったかもしれませんが、出来る限りの説明をさせていただきました（本当はもっともっと説明するべきポイントはあったのですが、すべてを書くととんでもなく長くなってしまうので…すいません）。私のような一心臓外科医のために、このような場を設けてくださったスタッフの方々には、感謝してもしきれません。

約半年間、素晴らしい作品に出会え、素晴らしい人々と共に仕事ができました。今思うと大変な日々は夢のような日々で、もう二度と経験できないと思うとひどく寂しい。

明日からまた「普通の医者」として生き、最高の手術が出来るように弛まぬ努力をしていきます。辛くなったり、めげそうになったら「ブラックペアン」を見て、共に汗をかいて頑張った皆さんとの日々を思い出し、励みにします。このページを読んでいただいた方々、言葉足らず、表現が稚拙で、分かりにくかったところもあると思いますが、1人の心臓外科医が日頃何を考えて、どんな思いで手術をしているのか、それと、撮影現場で体験した感動が少しでも伝わって、少しでも思いを共にできれば、これ以上の幸せはありません。2018年の春を私は一生忘れません。本当にありがとうございました。

前高生の強さ

～12人の会社の社長になって今思うこと～

じぶんカンパニー株式会社
代表取締役
池田　道成
（平成二十二年卒）

わたしは在学中、医者になりたかった。医者はかっこいい。何よりも病気で苦しんでいる人をその手で助けるのだから。下沖町で学ぶ一年次に郊外学習で行った、日大医学部の見学ツアーでそう確信した。

平成3年12月に、私は世田谷区で生まれた。賢く緻密で高慢な父と、愛情深いが天然で少々抜けている母、7つ離れた兄と5つ離れた姉。そして2歳のとき、伊勢崎に引っ越してきた。

「女手ひとつで子供3人を育てて、お母さん偉いね」と近所のおばさんによく言われた。そのころは良く分からなかったが、どうやら我が家はいつの間にか母子家庭になっていて、母は昼の派遣の仕事と居酒屋、コンビニの夜勤のアルバイトを掛け持ち、トリプルワークをしていたらしい。文字通り母の寝ている姿はほとんど見たことがない。小学校ではよく片親と言われ、いじめにあったが、そんなことよりも「このままではいつかこの母親は病気になる。助けなきゃ。」の思いが強かった。そんなわたしが医者を目指すのはごく自然なことだった。

高校を卒業してから9年経った今、医者にはならずに会社経営の仕事をしている。正確には医者になれなかったのだが、病気になった人を助けること以上に、人が病気にならないためにどうするか、の方が母のためになると今は信じている。

人の心と身体の健康は「食事・運動・排泄・睡眠」の4つの習慣によって作り出される。それらを一人ひとり徹底的にヒアリング・分析し、最適な生活習慣を提案、定着までサポートする、といった内容が弊社の手掛ける事業だ。世間ではいわゆる「パーソナルトレーニングジム」に分類されるが、他社との大きな違いは、「医療機関と大学との連携」「徹底的な個別化」「スタッフに理学療法士を採用」にある。スタジオは前橋を中心に3店舗、計画中を含めれば6店舗となる。従業員数は12名。立ち上げ時の1年半前は私たった1人であったため、そこから考えれば急拡大といえる。最近になり、本来の目的であった母の健康管理と、東京に一人で暮らす父の生活習慣指導を少しずつ行い始めた。

今でこそ安泰だが、立ち上げ当初はとても苦しかった。何よりもお金に悩まされた。そんなところを、前高の20歳上の先輩が救ってくれた。出会って2週間程度で、海の物とも山の物ともつかない私に500万円投資してくれたのだ。おかげで会社は軌道に乗り、500万円も色をつけてお返し出来た。

これは前高のつながりがあったからこそ、実現したのだろうと強く感じる。ご愛顧下さるクライアント様も、役所の担当者も、前高OBがとにかく多い。前高のような地域のトップ校のOBがその地域に根付き、リーダーとなることが、その背中をみる後輩連中をどれだけ勇気づけることか。中心商店街の再開発計画に、開成高校の分校誘致案が浮上しているようだが、前橋に根付くリーダーが今後益々増えそうだ。

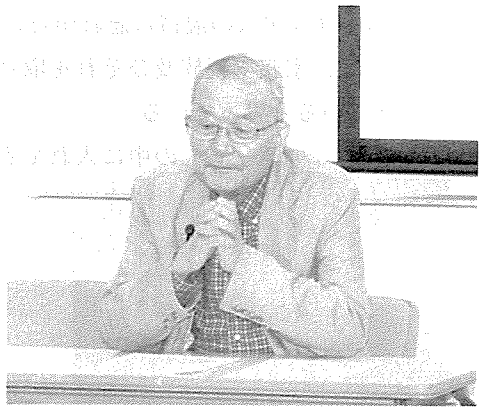
私も会社も、まだまだ発展途上だが、いずれは先輩方がしてくれたように、未来のリーダーとなる後輩達に手を差し伸べ、前高生の強さを伝えて参りたいと思う。

四季の会 会長　金子　明夫（昭和43年卒）

第35回　四季の会　平成30年 9月20日

「海外事業を成功に導く仕事術」

～イタリアNO1企業「アルカンターラ社」を育て上げる



小林　元 氏（昭和32年・前橋高校卒業）
元・東レ・欧州事業部長

東レで欧州事業を長らく担当した小林氏から、北イタリアでの事業経営や異郷の地での生活・文化の違い等について、お話しいただいた。

1974年小林氏は、東レの藤吉社長から、同社が開発した「人工皮革・スエード」をイタリアで生産し、ヨーロッパ市場に販売せよ」と命じられた。その時、どういう訳か、「但し、マーケッティングは、全てイタリア人に任せよ」との条件も付け加えられた。早速、小林氏はイタリアに赴任し、現地国営企業との合弁で「アルカンターラ社」を設立し、製造販売事業を立ち上げたが、イタリア側のマーケッティング戦略は、驚きの連続であった。

第一に、イタリア人はアメリカ人と違って、大量生産・大量販売を狙わない。むしろ10年20年かけて息の長い商品に育てると言う意図から、常に供給量を需要量よりも少なめにし、市場を品薄状態にするという戦略をとった。

その結果、「人工皮革・スエード」は市場に溢れているような汎用品ではなく、特品（specality goods)と言う位置づけを得ることが出来た。

第二に、美的感覚の鋭いイタリア側は、天然皮革にはない、「人工皮革・スエード」の色の美しさとタッチの良さを活かし、最も機能性を的確に評価出来ると言われる、ゲルマン民族＝ドイツ人に売り込みをかけて成功した。

ゲルマン民族＝ドイツ人への売り込みに成功以来、ヨーロッパのどこの国に行っても、「人工皮革・スエード」は高い評価を得ることが出来た。

第三にイタリア側は、誰にでも

売ると言うアメリカ式マーケッティング手法ではなく、売先はヨーロッパの上流階級及び中流階級の上の層に絞るという、マーケッティング手法をとった。

「人工皮革・スエード」の機能性を評価し、相応の価格を支払ってくれる階級の人に売先を絞ったことにより、一層の高級感を高めることが出来た。

藤吉社長に言われたとおり、イタリア側にマーケティングを任せた結果、衣料のみならず、80年代には家具、90年代には自動車の内装と、用途範囲を拡大し、「アルカンターラブーム」と呼ばれるようになり、「アルカンターラ社」はイタリアNO1企業になることが出来た。

'90年代に入り、イタリア政府の国営企業の民営化政策により、「アルカンターラ社」の民営化候補に上げられた時、現地株主（国営企業)は強く抵抗し、東レと対立する事態と至った。この時のイタリア人の温情は忘れがたい。

イタリア人は誰も、国や会社が自分達を守ってくれるとは思っていない。彼らは、家族や親族及びそれを取り巻く仲間たちのネットワーク＝人脈の中で生活しており、その中でのみ守られ生きていると思っている。

そのネットワークの仲間のことを、「アミーチ」と言う。イタリア人の社会では、「アミーチ」の中に入れてもらわなければ生きていけない。

その「アミーチ」になるには、まず次の4点が最初の関門である。

(1)身だしなみ(装いとか色合い)は良いか、

(2)身のこなしは洗練されているか、

(3)話題は豊富で深みはあるか～つまり教養はあるか、そして

(4)言葉使いは上品であるか。

これに合格しないと、つぎの段階・関門には進めない。

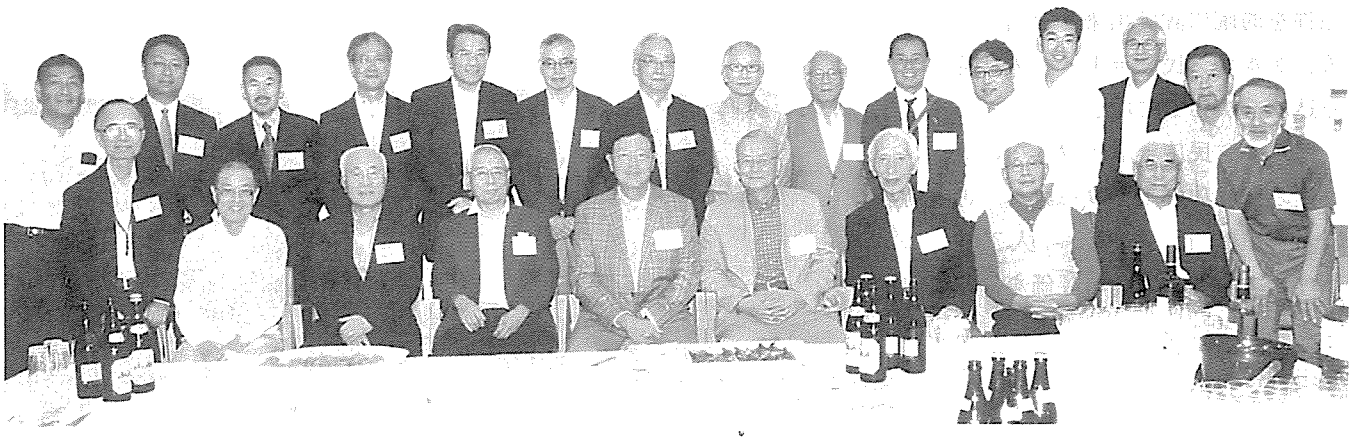
合格すると、⇒第一段階・ランチに誘われる、それに合格すると、⇒第二段階・家族でディナーに呼ばれる、

それにも合格すると、⇒第三段階・自宅に呼ばれる、最後の最後、⇒最終段階・別荘に呼ばれる。

イタリア人はこういう段階を通して、お互いの教養や文化程度(つまり所属する階級)を確認しあい、理解を深めるというプロセスを踏む。このプロセスを踏み、「アミーチ」になると、新聞情報とは全く異なる、種々多様な情報がさりげなく伝えられる。そして、もし困っていることを相談した場合、親身になって力になってくれ、表向きなかなか簡単には会えないような人を、紹介してくれる。「アミーチ」に助けてもらったことは一度や二度ではない。

1995年「アルカンターラ社」を紆余曲折の末、日系資本100％の会社にすることが出来たのも、「アミーチ」のお蔭に寄るところ大であった由。

小林氏の講演は、ヨーロッパとアメリカの文化の違い、またヨーロッパ社会が今でも階級社会であるという現実を、まざまざと再認識させてくれた。



2018年度　前中・前高京浜同窓会役員（一部新任・改選）

平成30年8月31日　学年幹事会改選

会　　長	家中　隆（昭和43年卒）
副 会 長	大谷　雄策（昭和37年卒）　細野　幸男（昭和40年卒）改選　角田　透（昭和42年卒） 金子　明夫（昭和43年卒）　細井　眞澄（昭和43年卒）　桜井　俊（昭和47年卒）新任
幹 事 長	浅見　幸夫（昭和47年卒）改選
編 集 長	岡庭　邦夫（昭和43年卒）副幹事長へ（下田令雄成）※会報秋号発行後改選
事務局長	神林　光（平成11年卒）
副幹事長	内藤　俊一（昭和39年卒）　星野　祐一（昭和41年卒）　大井　良久（昭和43年卒） 古谷　進（昭和46年卒）　井野　修（昭和48年卒）　藤井　信秋（昭和49年卒） 阿久澤克之（昭和52年卒）　高橋　俊晴（昭和54年卒）　野村　敦（昭和57年卒） 小川　広幸（昭和57年卒）　田村　和彦（昭和63年卒）　諸田　浩一（平成２年卒） 下田令雄成（平成６年卒）　黒岩　卓士（平成14年卒）　宮本　明憲（昭和53年卒）新任 編集長へ（岡庭邦夫）※会報秋号発行後改選
監　　事	高橋　勝（昭和46年卒）　植木　俊和（平成８年卒）
顧　　問	太田　宏（昭和27年卒）　岩佐　直正（昭和29年卒）　山本　雅造（昭和29年卒） 菊池　兵吾（昭和33年卒）　竹内　靖博（昭和35年卒）　平澤　一郎（昭和37年卒） 御手洗正博（昭和39年卒）

平成29年度　寄付者・会費納入者ご芳名

会報51号の本欄ご芳名の中に掲載漏れの方がおられることが判明しました。
謹んでお詫び申し上げますとともにここに改めて掲載させていただきます。

平成29年度寄付金・会費納入者　昭和39年　大谷　博 様（旧姓 橋上）

部会だより

ウオーキング部会

第15回

日時：2018年 4月7日（土）11時～
JR山手線・原宿駅表参道改札　集合

今年は、桜は散り葉桜、しかし、所々 八重桜

コース：原宿駅～代々木公園（葉桜）～表参道途中カフェで一休み 乾杯！～青山通り キラー通り ベルコモンズ建替中～梅窓院、青山霊園・墓地通り（葉桜）桜並木～国立新美術館～東京ミッドタウン（八重桜）～ 六本木アークヒルズ（サントリーホール前）～ オープンカフェAUXBで、遅い２時過ぎたランチ 乾杯！!! ２次会は、清水谷公園、満開の八重！!

参加者：29岩佐、35石原、36相崎、54中山、H11浜野、渋女・坂本、41星野　7名

世話係：S41・星野　090 - 7704 - 7100

ゴルフ部会

☆第40回記念ゴルフコンペは、平成30年4月19日（木）に東京オリンピックのゴルフ開催会場に決まった、埼玉県の名門、霞ヶ関カンツリー倶楽部にて開催されました。普段なかなかプレーできない、名匠井上誠一氏設計の武蔵野の美しい松林に囲まれたフラットな林間コースです。家中同窓会会長のご紹介により、やっと4組抑えることが出来ました。

☆参加者は、4組16名でした。当日の成績は下記の通りです。

優　勝　野村　　敦（昭和57年卒）
準優勝　牛久保准一（昭和42年卒）
３　位　平澤　一郎（昭和37年卒）
ベスグロ　野村　　敦（昭和57年卒）

☆優勝者は、野村。不思議と記念大会では強く、第20回（ロペ倶楽部）第30回（東千葉CC）に続いての栄冠でした。準優勝は、牛久保氏。第33回の初参加から過去の最高成績の3位を上回りましたが惜しくも2位。次回は是非、優勝の栄冠を。3位入賞は平澤氏。35回大会も3位と優勝は目前に迫ってきています。
有名なアリソンバンカーが大きく口を開けており、スコアを崩す方が続出でした。

☆初参加者は小松氏。最若手の平成13年卒です。少しずつ若手も増え、和気藹々のムードの中、皆さん楽しい一日を過ごしておりました。

☆第41回大会は、10月25日に、おおむらさきゴルフ倶楽部で開催しました。結果につきましては、次回の会報をお楽しみに・・・

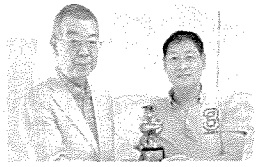
☆追悼　京浜同窓会の元副会長にて顧問で、ゴルフ部会創部にもご尽力頂きました、初代ゴルフ部会長の下城次郎氏（昭和28年卒）が、本年春にご逝去されました。40回開催の内26回にご参加され、いつも楽しく、気遣いを持って接して頂けた大先輩でした。
何度も準優勝しながら、一度も栄冠を手にすることが出来ず無念だったかなと思っております。
ご冥福をお祈りいたします。

☆ゴルフ部会事務局幹事　野村　敦（昭和57年卒）
連絡先　株式会社ライフプラザパートナーズ
勤務先　03 (5322) 7213　野村携帯　090 (3875) 0682
E-Mail：ars77@w3.dion.ne.jp
携帯電話・メールともにお気軽にご連絡ください。お待ちしております。

第40回前橋高校京浜同窓会ゴルフ部会成績表

平成30年 4月19日（木）　霞ヶ関カンツリー倶楽部　西コース

	氏　名	卒年	IN	OUT	TOTAL	HC	NET	次回HC	備考
優 勝	野村　敦	S57	43	42	85	10	75	7	BG
準優勝	牛久保准一	S42	42	45	87	10	77	8	
3 位	平澤　一郎	S37	48	48	96	17	79	12+3	
4 位	大塚　孝之	S57	46	51	97	18	79	19	
5 位	浅見　幸夫	S47	52	48	100	19	81	20	
6 位	神林　光	H11	48	54	102	20	82	21	
7 位	小松　良匡	H13	56	62	118	36	82	28	初参加
8 位	御手洗正博	S39	48	50	98	15	83	13+3	
9 位	岡崎　徹	S53	47	57	104	20	84	21	
10位	鶴谷　誠	S54	52	49	101	13	88	14	
11位	今野　義忠	S38	52	57	109	19	90	17+3	
12位	神山　紘一	S37	50	54	104	13	91	11+3	
13位	大木　安弘	S29	50	60	110	16	94	12+5	
14位	小泉　勝海	S30	53	61	114	18	96	14+5	
15位	高橋　勝	S46	55	55	110	12	98	13	
16位	橋爪　敏明	S49	58	63	121	23	98	24	



＊INコース PAR 37にて、合計PAR 73
＊同ネットは年齢優先
＊初参加者は、優勝・準優勝なし

将棋部会

一、話題

1. 女性の活躍～

野原未蘭

極く最近まで、女性は将棋で男には勝てないというコンセンサスが何となくあった。

ところが「将棋世界」誌10月号を見て驚いたことに「野原未蘭」さんという富山市の女子中学生が中学生将棋名人戦で優勝してしまった。さっそく棋譜を盤上に並べて鑑賞してみると、その先の先まで読んだ先制攻撃の激しさ、巧みな寄せへの落し込みには呆れ返ってしまった。既にプロ並みの棋力があると感じざるを得なかった。

女子の水泳では池江璃花子さんが、アジア選手権で女性で初めてのＭＶＰを獲得した。正に若き女性恐るべしの時代が到来したのではないか。

2. 菊池―富山県年輪ピックに参加

今年11月3日（土）から、富山県小矢部市で年輪ピック大会が開催された。小生、さいたま市の予選会に参加したところベスト・スリーに入り、将棋の団体戦のメンバーに選ばれて参加してきた。老骨に鞭打って将棋の再勉強と、貴重な経験をした。私事ながら、報告する次第である。

二、例会成績

（上段勝ち、下段負け）

（1）平成30年5月20日
菊池1―1　丸山2―0
打越0―1　大木0―1

（2）平成30年6月12日
菊池1―1　打越2―1
大木1―2　角田1―1

（3）平成30年8月19日
菊池1―2　丸山2―0
打越1―0　平澤1―1
大木0―2

（4）平成30年9月16日
菊池2―4　丸山2―0
打越0―1　平澤2―1

80代半ばを過ぎて、打越さんは勝率50％は素晴らしい。

文責　菊池兵吾（昭和33年卒）

前高も他校にならい東京に於けるOBの憩いの場を作ろうと言う事で2011年にパブ会を発足、本会も以来順調に今日まで推移して来ております。

本会は多数参加が予想される年配者に配慮、帰宅が遅くならない様に16：00～19：00位の会合時間で行っており、皆が気楽に来れる様に煩わしい出欠席は取らず、いつ来ていつ帰っても良い事に成ってます。

各自が自分の飲食分を自分で清算する仕組みで会場も信頼の於ける大手企業の運営で、然も料金もリゾナブルなので安心して寛いでます。

最近の参加者は毎回15名前後なので皆で車座になって気安く話し合いが出来ます。集まる方は仲間思いの人格者で、過って社会の各分野で活躍した人達ばかりなので社会生活に役立つ貴重な話等が聞けて非常に有効と皆さん感じて居る様です。

と言う事で、この様な会に体質が会って居る様でしたら、先ずは一度パブ会を覗いて見ては如何でしょうか？

「前高パブの会」へのお誘い

会の日時・場所

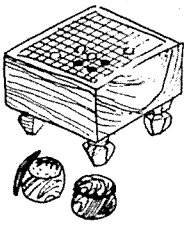
日時　**毎月 第二水曜日**
午後 4 時半から

場所　新宿区新宿 3 - 28 - 9
新宿ライオン会館2階
ダブリナーズ
電話　03 - 8352 - 6606

最近、仲間の為、社会の為に関係した情報交換等の話題に就きいくつか挙げると下記の様な物が有りました。

1．地震等の折の危機管理に関する数々の貴重な情報の交換。
2．健康、医療等に関しての数々の貴重な情報交換。
3．群馬県活性化に関し会で出て来た数々の貴重な提案を纏めて都度個人名で県の方に提案。

囲碁部会

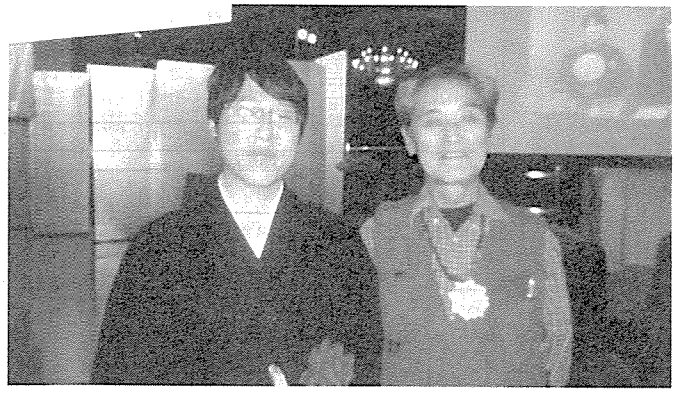


囲碁界は井山裕太7冠が国民栄誉賞に輝き、祝賀会が紀尾井町のホテルニューオータニでありました。これをきっかけに減少気味の囲碁人口が、若い人たちへの普及につながっていくのではという期待もあって、日本棋院の理事長の挨拶も熱のこもったものとなりました。その普及の末席にあるわが京浜同窓会囲碁部会も私と住谷春也さんがお祝いに出席しました。住谷さんは昭和6年生まれで今年数え88歳の米寿ですが大変お元気で遠路前橋から駆けつけていただきました。棋力は4段ですが免状はルーマニアのブカレスト大学に在職中日本棋院から取得したもので、ルーマニアでも囲碁の普及に尽力していたとのことです。

ということで7月の例会の打ち上げは住谷さんの米寿のお祝いの乾杯で始まり、続いて孔令文プロの中国のＡＩの最新事情の話になり、2年前に世界を震撼させたアメリカのＡＩアルファ碁をはるかに凌駕するＡＩが誕生したとか、それは耳を疑うほどの驚きでした。すでにアメリカでは囲碁ＡＩの研究は打ち切っているので、中国のものがトップレヴェルですが、なんとプロに2子置かせる現在のＡＩよりさらに3子強いＡＩが現れたと。いやはや「そりゃあ、神より強い！」と開いた口がふさがりませんでした。

写真は祝賀会場での井山7冠（現在6冠）と住谷さんとのツーショット。ちょっとぶれ気味で失礼。

山本茂正（昭和41年卒）



いずみ囲碁ジャパン：
住所　中央区八重洲2―2―1
住生八重洲ビル　地下1階
電話　03―5202―6093

人気のパネルディスカッション

皆様のご要望にお応えして「異業種交流フォーラム」は身近で関心の高いテーマで開催します。

第１回は「個の時代の同窓生の連携」、第２回は「相続」、第３回は「起業」、第４回は「マスコミ」、第５回は「ビジネスはアイデア」をテーマに開催しましたが、今回は、高齢化社会で最も関心の高い「年金」の話題です。若い世代にとっては「年金はちゃんともらえるのか？」、中高年にとっては「何歳からいくらもらえるのか？」、全世代に共通「そもそも年金制度自体が破綻しないのか？」などなど、年金に詳しいパネラー３名をお迎えして、年金についての疑問や不安にズバリ！斬りこみますので、パネルディスカッションに参加してみませんか。

第6回　前高京浜同窓会　異業種交流フォーラム「パネルディスカッション」

1．日　時　　平成31年(2019年) 2月8日（金）18:30～20:30

2．テーマ　**「どうなる年金～自分はいつからいくらもらえるのか？～」**

コーディネーター・**阿久澤克之** 氏（昭和52年卒　元ＮＨＫ，ＰＲプロデューサー）

パネラー　・**関根　靖彦** 氏（昭和37年卒　全国労働衛生機関企業年金基金 常務理事）

・**大谷　雄策** 氏（昭和37年卒　元三井信託銀行取締役年金企画部長）

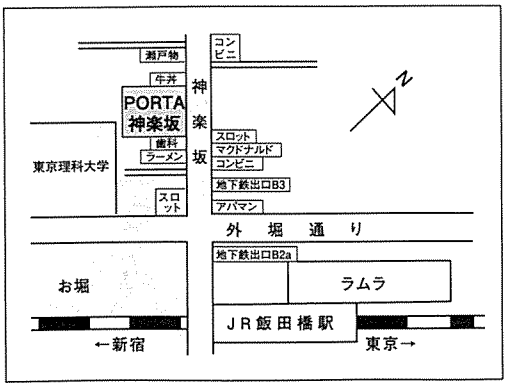
・**下島　　敦** 氏（昭和55年卒　厚生労働省年金局 企業年金・個人年金課 財政分析官）

3．懇親会兼異業種交流会　　＊パネルディスカッション終了後

4．費　用　　懇親交流会　2,000円（学生／パネルディスカッションのみ参加者は無料）

5．会　場　　理窓会　東京都新宿区神楽坂2-6-1　PORTA神楽坂７階
パネルディスカッション：第２会議室　　懇親会：第１会議室
＊http://tus-alumni.risoukai.tus.ac.jp/access/hall

6．申込方法　　下記いずれかでお申込みください。
①ホームページ　http://web-dousoukai.com/maetaka-keihin/
②メール　maetaka-keihin@web-dousoukai.com
＊できるだけメールかホームページをご利用ください。

7．申込期限　　平成31年(2019年) 2月5日（火）

8．当日連絡先　　090 - 3213 - 1583（神林事務局長）